

私の英語学習方法・・・K先生にお話を伺いました

生命科学部の K 先生に英語の学習方法についてお話を伺いました。K 先生いわく、「耳から発音、頭で文法：英語は発音練習と文法学習の融合で鍛える！」

「耳から発音」：K 先生は**英語の歌**がお好きと伺いました。

末っ子で兄姉の影響を受けたのですが、兄達を買ってきた **80 年代アメリカンポップス** (Hall & Oats, Air Supply, Chicago, Eagles など)、聞いたまま適当に歌っていました。歌詞を調べると意外と正しく、**今でも口ずさんでしまいます**。カーペンターズも美しい歌声でお手本のような発音だったのですが、若くして亡くなったのは残念でした。いつかコンサートに行きたかったです。

毎週発表される全米ヒットチャートを記録なさっていたそうです

Z 会の通信教育の封筒を切り開いた裏紙に、全米チャートを毎週 100 位まで全部書き写してました。「アメリカントップ 40」という Billboard の全米ヒットチャートを紹介するラジオ番組があり、暇があればずっと聞いたり、曲の日本語訳をヒントに原曲の歌詞を聴きとったりしていました。歌詞は韻を踏んだり倒置があったり、学校で習う文法的にはおかしいと感じる場合もあり難解なのですが、**耳で聞いて発音する・リズムに乗ると**いう意味では役立った気がします。当時の DJ の小林克也さんは発音がぴかーですが、米軍のラジオ番組を聞くなど耳から学習されたそうです。今のクリス・ペプラーさんの存在で、いい声でいい英語の発音に憧れたものです。

クリス・ペプラーさんが英語の学習は歌から入るのが良いとおっしゃっていました。**洋画**もお好きだとか？

80 年代、高校から大学の時にはレンタルビデオ店がたくさん出現して、1 泊 2 日で 3 本借りると安くなったりしたので、洋画を 1 日に 3 本見たおしたりしました。今なら DVD とか、オンデマンド配信でしょうか？**字幕をばっとみて内容を把握しつつ、英語で何と言っているのかできるだけ聞き取ろう**としています。字幕翻訳の戸田奈津子さんによると、字幕はどうしても意識になるとのこと、例えば「SanFrantastic」(San Francisco と fantastic をかけた造語) も「エグい」となってしまう。**なるべく英語そのものを聞き逃したくない**と思っています。アメリカンポップス音楽評論家の湯川れい子さんも、映画を見る時は 1 回目は字幕を読みながらストーリーを把握して、2 回目はなるべく字幕を見ないで聞き取るようにして、3 回目には英語だけでわかるようにする、というトレーニングをされていたそうです。

勉強としてのリスニングをなさったことはおありですか。

こちらにも兄の勧めで、中学になると英語が始まるからと、小学生の頃にNHKラジオの英語教育番組を聞くようにしました。「基礎英語」とか「ラジオ英会話」とか。主に録音して聞いていました。三日坊主の私は、すぐに録音がたまってしまって、大変でしたが、文法の解説だけでなく、**role play**で音読も練習させられるので、きちんと利用すればとてもためになると思います。当時は毎月テキストを購入していましたが、今ではテキストは買わずとも、聞いてわかるので、通勤の往復の時等に、音楽代わりに聴いています。それならただでできるのでお勧めです。ただし、外を歩いているときに声を出すのは気が引けますが。人目をはばかって、小声で。

その他で感じるのは、リズム感と抑揚が重要。聞き取る際にも大事で、重要な語句は強調して話すので、全部が聞き取れなくても、なんとなくわかる気がします。日本語にはイントネーションなど、あまりないような気がします。なので、これも生の英語を聞いたり、英語を音読したり、しないと鍛えられないでしょう。

「頭で文法」：一方で文法学習も大事だと感じていらっしゃるんですね。

文法をきちんと学ぶことは、もちろんとても重要です。英語論文などを読むためには、文法、特に構文は大事で、語句や節の切れ目とか関係代名詞とか、文の構造を正確に把握できないと、複雑な文章は読みとれません。

英語論文を執筆するとなると、間違いなく語彙力や文法力が必要になります。たとえば、実験の目的を説明するのに「～するために」はよく使います。In order to とか to 不定詞が一般的ですが、何度も使うとワンパターンで幼い文章ととられそうなので、so as to とか so that 構文など様々な表現を使用します。使役動詞も allow を中心に make や have, get 等使い分けたりします。接続詞のバリエーションも大事で、although/even though や despite/in spite of とか、but/however、while/whereas、nevertheless/nonetheless とか。So は会話では多用してしまいましたが、文章にはあまり使わないようにしています。代わりに hence, therefore, thus とかを使用します。言い換えの引き出しは多い方が良いでしょう。

語彙の知識を広く深く持つことが大事ということですね。語彙の学習に何かコツはありますか。

二つあります。一つ目のコツは文章を読む時にわからない単語があってもいちいち調べないこと。日本語の小説を読むときに、仮にわからない単語があっても、その度に辞書で調べたりはしないと思います。漢字の字句だとそれぞれの漢字の意味から類推が可能ですし、前後の文脈もヒントになります。英語も同様です。多少わからなくても、とにかく最後まで読み進んで全体の内容を把握するトレーニングをするとよいでしょう。一度最後まで読み切ると、さっきわからなかった文や単語の意味がなんとなくわかったりします。

まずは概要を読み取った上で単語の意味を調べると、意味が複数ある場合など、どの意味で使われているか、正しく理解できますね。

この方法の良いところはもう一つ、まず概要を把握してから読み返すと、文の中の区切りが見えて文構造が理解できます。

文の中の区切りがどこに入るのかが見えるとさらに深い理解につながるということですね。語彙学習のコツの二つ目は何ですか。

二つ目のコツは、英語の単語は接頭辞等で分解しやすく、語源、派生がわかりやすいので、単語は分解して学習すると良いでしょう。接頭辞や語源を知ると、同じ接頭辞や語源を持つ派生語等の学習に役立ちます。

接辞（接頭辞・接尾辞）や語根の知識は語彙の意味を類推するのに便利な知識だと思います。接辞は漢字でいうなら「部首」、語根は「つくり」にたとえられます。接頭辞の“un”や“dis”が打消しの意味を持つ（unimportant、dishonest等）というのは学習済みかもしれませんが、語根の“-cyt/-cyte”が細胞の意味を持つ（monocyte, cytokine等）、接頭辞の“heter-/hetero-”が「異なる」（heterotypic）などの知識があると生命科学の語彙が増えますね。

研究者としての英語にまつわること経験談をお聞かせいただけますか。

初めての国際学会は、フランスのパスツール研究所でのポスター発表でした。変異株名 secA341 を無意識に secA さんよんいち、と言ってしまい、質問者に secA, what? と言われて、恥ずかしい思いをしました（笑）。

ポスター発表は質問に答えるという意味ではぶっつけ本番的なことがあるかと思います。口頭発表はいかがでしょうか。

国際学会での最初の口頭発表では、父親も研究者だったこともあって、**スライド1枚つき、1枚のカードに発表原稿を書いたカード集**を作られました。さらに、家の離れに住んでいた外国人のフルブライト留学生に、発表原稿の音読をカセットテープに録音してもらって、現地の発表前夜まで、**何度も聞き返して音読練習**をしました。プレッシャーは半端なかったですが、発表が終わった後に、イタリア系のアメリカ人に、「すばらしい発音だったけれど、どこかに留学していたのか？」と感激されて、発表内容が伝わったこと以上に嬉しかったです（留学はしたことはありません）。

今でも、海外発表の時には、さすがにネイティブに音読してもらうことはないですが、**原稿をきちんと作って、音読練習**をするようにしています。

口頭発表ではカードの準備や音読等事前の準備を万端にする、ということですね。学会というと懇親会がつきものですが、そこでのおしゃべりはいかがでしょうか。

そう見えないかもしれませんが、**元来人見知り**なので、日本人であろうが外国人であろうが、会話をするのは基本的に苦手です。が、以前、英国の大学で開催される学会に行ったとき、英国の大学にはバーがあって、そこで懇親会をやっていた時に、やはり人見知りが発動し、ましてや英語での会話ということもあって、ぼーっとしていたら、バーカウンターの隅で、一人でぼーっとしている外国人がいたので、話しかけてみたら、確かスウェーデン人だったと思いますが、やはりとてもシャイな人で私同様、気おくれしていたようでした。スウェーデン人なら英語は得意だとは思いますが。英語をしゃべると皆社交的で陽気なイメージがありましたが、そうでもない人もいるんだと、心強く思いました。英語は喋れても、シャイな人の集まりがあれば、英語で会話する自信がつきそうな気がします。すなわちこちらも**慣れと、話す勇気が必要**でしょう。

学会に行く際は、**発表は徹底的に準備**し、**懇親会では勇気をもって話しかける**ということですね。

そうですね。ただし、話すだけなら、難しい言い回しや、文法なんて必要ないので
は・・・と思うのは間違いです。助手時代に、高名な教授の先生に、「英語を話す
ときには、なるべく主語と述語をつけてきちんと話さない」とアドバイスされま
した。例えば単純に単語を羅列しても、通じるかもしれませんが、それは幼児の話
し方であって大の大人が、ましてやサイエンティストがそんな話し方をすると、知
性がないと思われてしまうからです。なので、過去形や三単現のsとか、冠詞と
か、多少文法が間違ってしまうと、とかく間違いやすいですが一なるべくフル
センテンスで話そうと努力しています。ですので、慣れも大事ですがやはり文法も大事だと思
います。

なるほど、①生の英語を聴いて発音して英語特有の抑揚とリズムを身につける、②文法や構文は
しっかり学習して、論文講読や執筆に備えるだけでなくサイエンティストとして恥ずかしくない
英語を話す、③語彙を増やして言い換え表現の引き出しを多く持つこと、まさに「耳から発音、
頭で文法：英語は発音練習と文法学習の融合で鍛える！」ですね。

今日はお忙しいところ、どうもありがとうございました。